

Title	國寶 秋草文壺
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.3 (1948. 11) ,p.93(353)- 93(353)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	口繪解説 特輯古代日本研究
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19481100-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ぬ原料の鐵を得るためであつたと思はれる。徴發された人民の或る者は海を渡つて戦ひ、また他の者は防人として筑紫の濱に送られたのである。

稻が野の幸の第一であることは永く變らなかつたが、あたかも大和の政權が鐵の農具をサチとした如く、資源と技術とに應じて、それぞれの特産の品を生み出すことに努力し、貢納の餘剰が交易品として賣買されるに至つ

た。こゝに産業と商業の始りがあり、やがてその間に働く商人の發生をも見るのである。日本文化の歴史は、少くともその初期に關する限り、ツトの歴史であつたと言つても過言ではないであらう。

なほ、國家統一の過程を中心に、ツトのチカラへの轉移を主題とした續稿「ツトとチカラ」(雜誌「交通文化」二十九號所載)を参照されたい。(昭和二十二年初冬稿)

國寶 秋草文壺

(口絵解説)

この壺は去昭和十七年四月、川崎市北加瀬、俗稱加瀬山の南麓より出土したもので、昨年末國寶に指定された。口縁部に僅少の缺損あるのみで完形を存し、高さ四二釐、口徑十六釐、胴部徑二九釐、形はやゝ洗煉味を缺くが、頸部の基部に段を有する點は、此の種の陶器としては珍らしい。土質は良好なるも細砂を含む點が注意され、焼成は堅緻、胴部下半を除いて全面に飴色の自然釉が見られる。

特にこの壺を特徴づけるものは殆んど全面に亘る秋草の圖様で、胴部中央にススキ、肩部には二重の圈線に圍まれた一種の文様帯にススキ、カラスウリ、ハギ等を表わし、口頸部にもススキ、トンボ、チョウなどが描かれている。すべて筆描で、稚拙の感があるが、筆致は侮り難い雄健さを示し、野邊の秋色を大膽に畫き出して遺憾がない。遠く銅鐸の繪畫を想起させる一方、和鏡の鏡背文様の系統を引き、一層自由奔

放、野趣に満ちた點が注目される。口縁内側に「上」字の篋書がある。

形も珍らしく、特にこの種の秋草文を畫いた例は他に類品がない爲、産地、時代に就いては學者間に異論が多く、遽かに決し難いのであるが、大體、古瀬戸の系統に屬すると見られ、古調を存する點から鎌倉初期を降らぬ遺品と考へて大過ないのではあるまいか。

發見地は、恰も去る昭和十二年、三田史學會で發掘調査を行ひ、我國で最初に木炭槨を確認し、豊富な遺物を出した加瀬山白山古墳の後圓部直下に當り、考古學上、加瀬の地名を一しほ不朽のものたらしめたのである。粘土を敷き、川原石を積んだ一種の遺構内から、火葬骨を納めたまゝ見出されたので、墳墓たることは明かであるが、土工々事中の偶然發見として、筆者の實見した際は既に全く破壊され、遺跡の詳細な研究を遂げ得なかつたのを遺憾とする。

ともあれ本壺藏品に、また新たな國寶を加へ得たことは、慶賀に堪へぬ次第である。

(清水潤三)